

『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第二集の構成

【巻頭言】

本報告書の巻頭には、深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクトに関係する機関の代表者、四名の方々から挨拶文をいただいた。このプロジェクトは、弘前大学と深浦町の連携協定による活動であるため、最初に、深浦町町長吉田満氏、弘前大学深浦エコサテライトキャンパス所長石川隆洋理事に、次に、本プロジェクトは、弘前大学人文社会科学部地域未来創生センターが行う地域貢献事業（文化資源地域文化活用部門）の活動でもあるため、地域未来創生センター長李永俊氏からのご挨拶文をいただいた。最後に所蔵者である春光山円覚寺副住職海浦誠観氏から、ご挨拶を頂戴した。

【第一部・研究編】

本編は、大きく「研究編」と「活動報告編」に分けて構成している。まず研究編では、二〇一九年七月に開催したフォーラムをもとに構成し、現時点での円覚寺所蔵古典籍調査の成果をまとめた。最初に、日本文学の分野で寺院資料調査を先導し、ご自身でも名古屋の大須観音真福寺などの調査を行う名古屋大学高等研究院の阿部泰郎先生より、特別寄稿として、宗教文化遺産としての寺院資料の意義について解説いただいた。また合わせて、深浦円覚寺所蔵『御遺告秘決』の解題を寄せていただいた。

次に、「研究」として、弘前大学より三名の教員が執筆した。初めに、七月のフォーラムで講演した、瀧本・渡辺二名の論考を載せた。まず、弘前大学教職大学院瀧本壽史教員が、日本近世史の立場から、近世における津軽と深浦について論じた。次に、円覚寺古典籍保存調査プロジェクトチームを代表して、弘前大学人文社会科学部渡辺麻里子教員が、円

覚寺所蔵古典籍調査の二〇一九年度の成果として、津軽の「知のネットワーク」について報告した。最後に同じく弘前大学人文社会科学部の原克昭教員が、深浦円覚寺所蔵印信類の概要を報告し、棒目録を示した。

続いて「解題編」では、聖教・典籍の個別の解説を行った。第一集に引き続き、第二集でも、円覚寺に特徴的な典籍を紹介するようにした。

【1】～【3】は、真言聖教関係書を掲載した。【7】～【19】は、円覚寺第二十四世尊岸書写の真言・修験関係資料をまとめた。【20】・【21】は、円覚寺第二十六世義観が修験宗復興を目指す活動の中で、帝国大学に修験関係書を寄贈した時の資料である。【22】は円覚寺の歴史に関わる資料で、本尊潤口観音の由来を記した資料である。

円覚寺の歴代住持は様々な本を蒐集しているが、版本もまた様々である。【23】は慈海宗順の慈海版の一書、【24】は、朝鮮版の一書である。

【25】～【28】は明治期の版本で、日本近現代文学が専門の尾崎名津子教員が担当した。円覚寺第二十六世義観は、修験宗復興のために尽力する一方で、仏教書以外の本（外典）も多く蒐集している。当時の円覚寺における学問の様相を知るために、円覚寺所蔵本は、様々な角度から総合的に調査していく必要がある。

【第二部・活動報告編】

第二部は「活動報告編」として、プロジェクトの活動報告を行った。まずはじめの「コメント」編には、このプロジェクトに関わる様々な立場の方に、コメントをいただいた。深浦町教育委員会、木造高校深浦校舎、深浦町町民、それぞれの代表の方が、それぞれの立場から、深浦円覚寺保存調査プロジェクトへの思いを記してくださった。

また次の「二〇一九年度弘前大学深浦エコサテライトキャンパス特別公開講座」のコーナーでは、二〇一九年一二月に開催した公開講座に寄せて、関係各位のコメントを載せた。主催する弘前大学社会連携課の担

当者、受講した木造高校深浦校舎の引率教員、参加した高校生と市民参加者のコメント、また講師として円覚寺の御寺宝を案内下さった円覚寺海浦由羽子氏にコメントを寄せていただいた。

最後に、活動報告として、円覚寺古典籍保存プロジェクト代表の渡辺が、今年の調査活動の経過報告をまとめた。

付録として、今年一年の活動について写真を掲載した。①に一年間の調査の様子、②に三月に学術交流協定を締結した時の様子、③に七月に開催した成果報告会の様子、④に醍醐寺聖教調査団との合同調査の様子、⑤に一二月に行った、弘前大学深浦エコサテライトキャンパス特別公開講座の写真を掲載した。

最後に、このプロジェクトの活動を紹介した新聞記事と、フォーラムのポスター・チラシを掲載した。

また、第二集の表紙は、『兵法虎之巻』（右上）、『秘蔵記』（左上）、『三昧耶戒序』（右下）、『大師執筆法』（左下）（いずれも深浦円覚寺所蔵、本誌中解題掲載）の一部を掲載している。

編集後記

弘前大学人文社会科学部 渡辺 麻里子

様々な方のお力添えで、今年も『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第二集が完成した。ご協力下さった皆様に、心より御礼申し上げます。

本書は深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクトの二〇一九年三月から二〇二〇年一月までの約一年間にわたる調査研究の成果を中間報告としてまとめたものである。調査は三年目となったが、まだまだ調査が及ばないところもあり、今後の調査によって判明することもあるかと思うが、

ともかくも、現時点での報告を一旦まとめておく。

調査をしていると、幾多の歴史を越えて、平成そして令和の現在に眼前に存在するこれらの資料を遺してくれた先人の強い意志を感じる。また様々な貴重な本を開くことができた時、それらの本に出会えた喜びを感じる。貴重な資料を遺してくれた先人に感謝すると同時に、未来に遺すにはどうしたら良いのか考えていかなければならない責任がある。未来につなげていくことは、現在の私たちの務めなのである。

現在この調査は、弘前大学の教員・大学院生・学部学生、深浦町民と高校生で進めている。調査に参加する理由は様々で構わない。それぞれの興味関心で参加していただき、地域の文化財に触れ、学びながら地域貢献する活動に、一人でも多くの方に参加していただければと願う。

この調査団は、地域の人と一緒に調査を行う調査形式で、「青森モデル」と称した、先駆的な資料調査方式で行っている。この報告書を見て調査に興味を持った方、参加してみたいと思われる方は、深浦町の広報誌を見ていただき、また深浦町教育委員会にお問い合わせいただければと思う。

調査は三年目となったが、まだまだ全体像は把握できずにおり、本報告書も、不備遺漏が多いことと思う。各位には、御教示賜りたくお願い申し上げます。

深浦円覚寺古典籍調査プロジェクトは、様々な方のご協力ご支援に支えられている。調査・閲覧を許可下さっている所蔵者の円覚寺、本の搬入搬出に協力下さり、調査会場を提供して下さい、深浦町役場の皆様にも心より御礼申し上げます。また、調査に協力下さっている全ての皆様に心より御礼を申し上げます。

末筆ながら、本報告書の製作刊行に尽力下さった、有限会社小野印刷所のご担当の方々に衷心より感謝申し上げます。